大小暦と江戸座俳諧

――二世祇徳交流圏に注目して――

神谷勝広

一　大小暦の流行と錦絵の進展

大小暦―和暦の月の大小（大は三十日、小は二十九日）を絵などで工夫し表現した暦―の流行が、錦絵の進展に寄与した。このことは、たとえば、大久保純一『浮世絵』（岩波新書、二〇〇八年）「大小暦のブーム」が、

二、三色しか用いられない紅摺絵という不完全な技術は、いつかは対象の固有色も再現できる完全な多色摺へと発展すべきものであったが、その直接の契機は偶然といってもよいようなことであった。完成された多色摺である錦絵の登場は、浮世絵版画の歴史にとっての一大画期であった……幕臣諏訪頼武が文政四年（一八二一）に著した回想録『仮寝の夢』中の「錦画之事」に、次のように記されている。

今の錦画は明和の初大小の摺物殊外流行、次第に板行、種々色をまじへ、大物になり、牛込御旗本大久保甚四郎俳名巨川、牛込揚場阿部八之進莎鶏、此両人専ら頭取に而、組合を分け、大小取替会所々に有之。後は湯嶋茶屋などをかり、大会有之候。一両年に而相止。右之板行を書林共求め、夫より錦絵を摺、大廻に相成候事。

…大小暦は…その優劣が争われるようになり、牛込旗本の大久保忠舒（巨川）と阿部正寛（莎鶏）をそれぞれの頭取に戴いて、江戸の料理茶屋の座敷を借り、さながら絵合せのごとき会がおこなわれた。

と、江戸期の資料『仮寝の夢』を引用しつつ述べている。大小暦の流行において、「牛込御旗本大久保甚四郎俳名巨川」と「牛込揚場阿部八之進莎鶏」が重要な役割を果たしていた。

本稿は、巨川・莎鶏に関する認識を深め、そこから江戸座俳諧（特に二世祇徳）との繋がりや、政治状況（いわゆる田沼時代）との関連に言及する。

二　先行研究の問題点

まず、巨川と莎鶏に関する研究では、井上和雄・森銑三・小林忠の論考が重要である。

井上和雄『浮世絵師伝』（渡辺版画店、一九三一年）は、巨川について、

…俳諧をよくし俳名を菊簾舎巨川といひ、俳人笠家左簾の社中たり……一説に彼を以て春信と同一人なりとし、或は「巨川工」と落款ある版画を直ちに彼の筆なりとするものあれども、そは勿論誤謬と謂ふべし。蓋し其の「工」とせるは「考案」の意味にして、少数の例外を除けば、画は多く春信の筆成りしものなり。……

と言い、莎鶏についても、

明和二年の摺物に「莎鶏工」の下に水光洞の印をしたるもののあり。或は莎鶏組を押印したるあり。……

と指摘する。要点は、

- 巨川の文化的背景には俳諧があり、莎鶏も俳号と思われる別号「水光洞」を持っていた。
- 「巨川工」「莎鶏工」の「工」は、考案者の意である。

となろう。

森銑三「春信版画の巨川と莎鶏」（「画説」六十五号、東京美術研究所、一九四二年五月）が、幕臣諏訪頼武『仮寝の夢』の中に「錦画之事」という記述を見出し、研究を大きく進展させる。

…巨川は旗本の大久保甚四郎といふ人だった。……。寛修譜の記載に拠れば……五年五月に西城の御書院番に列した。……安永二年十一月に致仕し、六年七月二日に没した。……

とし、また、

…莎鶏の阿部八之進の方はといふと、重修譜の阿部の箇所を調べたが見つからぬ。たゞ八之丞正寛といふ人があつて、巨川の忠舒と同じく安永六年に歿してゐる。……「仮寝の夢」に八之進としてゐるのが八之丞の誤だつたとすれば、莎鶏はこの人になる。

と述べ、巨川・莎鶏の素性を浮かび上がらせた。

小林忠『浮世絵大系2春信』（集英社、一九七五年）「総説」も注目すべきである。

…四時観派の中心人物であった祇徳の別号水光洞、祇明の別号莎鶏を、それぞれ一つ借りて合せ用いたのが絵暦期の水光洞莎

鶏こと旗本阿倍正寛だった…

「水光洞」「莎鶏」という号の出所を見抜かれたのは慧眼といえる。しかしながら、時期的に祇徳・祇明が、当該の莎鶏の師とは考えられない。よって、解明すべき事柄は残る。

次に、巨川の仲間達「巨川連」や莎鶏の仲間達「莎鶏組」に関する先行研究も確認しておく。具体的には、「巨川連」は、小林忠「「工」案者　錦絵草創期における絵暦や摺物の企画者」（『原色浮世絵大百科事典』第三巻、一九八二年）によって五名が推定されている。落款に「巨川連中」「巨川模写」などとあることが、その根拠である。一覧の形で示せば、次のようになる。

義鳳	巨川連中義鳳工
其友	自得叟図巨川模写
故厓	巨川連中故厓工
芝房	巨川連中芝房工
里川	巨川連中里川工

そして、「莎鶏組」のうちの六名が、松村真佐子「錦絵成立の一考察」（鈴木俊幸編『出版文化のなかの浮世絵』〔勉誠出版、二〇一七年〕）・小林忠前出論文で推定されている。莎鶏組の印・俳号の類似・王朝美人画の組物として作成されたことが、その根拠とされた。

麦十	莎鶏組印
夢鶏	俳号の類似
莎鷹	俳号の類似
花橘	王朝美人画組物
至連	王朝美人画組物
木髪	王朝美人画組物

松村・小林の指摘によって「巨川連」「莎鶏組」の存在は確実だが、どのように巨川や莎鶏と関わっていたかはわかっていない。

以上、先行研究を整理した。改めて問題点を示す。

- 巨川も莎鶏も俳諧との繋がりは想像されるが、不明部分が多い。
- 「巨川連」も「莎鶏組」もどのような繋がりを持った仲間であったかは、未詳である。

三　巨川に関する検討

巨川と俳壇の関係性を考察する上で、巨川編『世諺拾遺』の分析は避けられない。従来の説明として、『世諺拾遺』解説部分（図録「錦絵の誕生」〔江戸東京博物館、一九九六年〕）をあげる。

『世諺拾遺』　宝暦8年（1758）

巨川の編集した絵入り俳諧書。……巨川の俳風は洒落と滑稽を重んじる江戸座俳諧に属するものであった。巨川自らも挿絵を

描いているが、その他に奥村政信・俵屋宗理・石川豊信といった専門的な画家の名も見え、巨川の幅広い交遊関係をうかがうことが出来る。

『世諺拾遺』は、百九十八名が入句し画が添えられている。

同書は、確かに師匠左簾ほか多くの江戸座俳諧の関係者が入句する。左簾の協力がなければ江戸座関係者をこれほど集められなかったであろう。しかし、『世諺拾遺』は、基本的に各自一句のため、編者巨川との関係の濃淡を判断しがたい。

意外な入句者は、年路（江戸座ではない東武獅子門の有力者で、旗本山角四郎左衛門）である。彼が入句した理由は、西の丸書院番士として巨川と同僚だったためであろう。

『世諺拾遺』が絵俳書であったことからすれば、挿絵担当者にも注目する必要がある。従来、有名な奥村政信・俵屋宗理・石川豊信・勝間龍水を重視しているが、彼らは一画あるいは二画のみで、いわば、お飾りである。実際には、編者の巨川（三十二画）が突出し、祇貞（十画）が次に多い。巨川にとって、挿絵での協力者祇貞は貴重である。祇貞（一七二八～一七七九）は、父の初代祇徳没後、二世を継承し、江戸座の存義側に属し判者となり、俳風を父の頃とは変えている。そして多数の大名・旗本を始め、夏目成美・五世市川団十郎・烏亭焉馬・一筆斎文調・窪俊満・湖龍斎・北尾重政とも関わり、大きな交流圏を形成する。①

つまり、『世諺拾遺』の分析からは、巨川にとって、俳諧の師左簾・職場の同僚年路、そして絵で繋がる祇貞（後の二世祇徳）、が重要な存在といえる。では、彼ら三人が「巨川連」の工案者と、どう繋がっているのか。

左簾関係では、其友が注目される。宝暦六年刊『俳諧たま尽し』において、左簾とともに連句へ参加している。左簾との繋がりで、其友は巨川連中となったのではないか。

年路は、本人自身が大小暦（「見立雨乞小町」・年路工「年路」・画は春信か・明和三年）を作成している。同作は七枚組であることから、琴雅・五樓とその他現在未詳の三名が年路と一つのグループを形成していた。また、東武獅子門系俳書『二夜歌仙』（明和五年刊）には、年路とともに巨川連中の芝房も入句している。芝房は年路を介して巨川連中となったのではないか。

つまり、巨川は、俳諧の師左簾や、俳諧の系統としては異なるが同僚だった年路と関わりながら、大小暦の流行を先導していったと思われる。

ここで不審を覚えるのは、祇貞（明和期には二代祇徳になっている。以下では二世祇徳とする）と「巨川連」の接点が見つからないことである。二世祇徳は、大小暦の流行と無関係だったのか。

実は、二世祇徳は、莎鶏を含めた複数の自分の弟子を大小暦の流行に関与させていた。

三　莎鶏に関する検討

莎鶏が誰を俳壇の師としていたかは未確定だった。そこで改めて当時の俳書を調査した結果、二世祇徳の歳旦帖に句を入れていた。つまり、二世祇徳こそが莎鶏の師である。

宝暦十三年歳旦帖、

御庭とそ轉り初ぬ百千鳥　水光洞莎鶏子
恋ならぬ師走の中の芥川　仝
ふところて肌をぬきたる梅見哉　仝

明和四年歳旦帖帖冒頭の三つ物

一雫漏剋よりそ国の春　自在庵祇徳
浮橋こゝに門松の注連　莎鶏
其声も歌詠鳥の名にめてゝ　楽水
蓬莱の真砂ひろはん磯馴松　水光洞莎鶏
帆も十分に御船乗始　祇徳
佐保姫の春まつ梅の伏籠哉　仝

莎鶏と二世祇徳の関係が確定したことで、明和初の大小暦の工案者に関する情報も得られる。既に「莎鶏組」と推定されていた至連・木髪も二世祇徳に繋がっており、さらに従来莎鶏との関係を見出されていなかった帯河（「扇をつくる美人」・帯河工・明和二年）も、同門と判明する。

至連は、

明和四年の二世祇徳歳旦帖に、

うつり気の梅や師走の人来る　至連

木髪は、

宝暦十三年

むめか香や入相の鐘はまた寒し　木髪子

宝暦十四年（明和元年）

春雨やついと眠たき小松原　木髪
みとり子を抱は忘るゝ師走かな　木髪

明和二年

余所の子のわるさも見へぬ師走哉　木髪子

明和三年

何焚て野路の煙や春の雨　木髪子
入相の鐘に春や見ゆらん年の宿　木髪子

安永七年

又ふゑるとしの宝そ老の春　春窓木髪
明れは二条の番なれは

先越へん年の関路の伊達道具　仝

そして、帯河も、

宝暦十三年

ひらきけり香も実も籠て花の春　帯河子

御福引の第一の福　祇徳

とし越に根津の社の祓哉　仝

宝暦十四年（明和元年）

梅か香や廿五日の人通　帯河子

明和四年冒頭の三つ物

余か本復せしを祝して

丈夫なる鶴のあゆみや家の春　帯河

御庭流石に元日の岸　祇徳

年の内に春かきたてて花や梅　仝

至連の素性は不明だが、木髪は、旗本きっての名家であった本多忠弘（大番頭で七千石）である。[2] 帯河は「帯河子」とある。二世祇徳歳旦帖では大名・旗本クラスの人物には「子」を付すことがあるので、帯河の身分も大名あるいは旗本と推測できる。すなわち、二世祇徳の門人が集団として大小暦の流行に関与していた。

先に述べたように、巨川は二世祇徳が祇貞と号していた時期から親しい。そして、莎鶏が二世祇徳に師事していた。したがって、二世祇徳は、巨川・莎鶏の両方と大小暦の流行時に深く繋がっていたのである。

では、二世祇徳と巨川・莎鶏の関係を、どう捉えておくべきだろうか。稿者は、次のように考えている。大小暦の流行において、表向きには、旗本の二人を担ぐが、二世祇徳こそが巨川・莎鶏の背後で実質的に仕切っていたのではないか。

しかし、そのような関係を想定するのであれば、二世祇徳には、さらに大物の権力者が後ろ盾となっていたはずである。それは誰なのか。

四　二世祇徳の後ろ盾
―本堂親房とその実父板倉勝清―

ここで、李冠の俳号を持っていた人物に注目したい。江戸座俳諧の秀国は、勝間竜水から魚介類の画稿を請い受け、門人・知人に発句を募る。それを宝暦十二年に絵俳書『海幸』（大本二冊、総数六十丁）として刊行する。その冒頭が李冠の句である。

○こい　鯉　為魚王

有五色名曰　赤驥　青馬　黒駒　白騏　黄騅

一種通身紅如金鯉尾如鳧或三岐曰金鳧魚　赤鯉を俗にひこいと云

むらさきにゆかりあり
かきつはたかいしけ江戸の洗鯉　李冠子

江戸座俳諧において、李冠が特別な立場を有していたことがうかがえる。

この李冠が、宝暦末から明和初にかけて、二世祇徳歳旦帖（しかも冒頭）に句を入れている。

祇貞（二世祇徳）宝暦十一年歳旦帖の実質的冒頭

乗初の午も新し花の春　李冠子
御門きりゝしと元日の栄　祇貞

宝暦十三年歳旦帖冒頭

元日や世に東のいちしるし　自在庵祇貞改祇徳
鶯は梅鶏は門松　李冠子

宝暦十四年（明和元年）歳旦帖冒頭

人の跡に我見見はやさん花の春　祇徳
巍々蕩々と門の松竹　李冠子

〈中略〉

愛山下に春を迎て

初日影幸明の烏森　田爪庵李冠子
造酒と隣れる御鏡餅　祇徳

明和二年歳旦帖冒頭

元日や行かふ人に貧相なき　自在庵祇徳
松優に竹直なる春　李冠子

〈中略〉

松立ぬ在番城も春は来ぬ　田爪庵李冠子
鶴に初日に御太鼓の鶴　祇徳
難波津の春を向ふに年の岸　仝

李冠はいったい誰か。条件としては、まず宝暦十四年歳旦の前書に見える「愛山下」（愛宕山下）に屋敷がなければならない。加えて明和二年歳旦句から当時「難波津」（大坂）で「在番」をしていたことも必須である。これらの条件を満たす者は、八千石を有し大番頭を務めていた本堂親房しかいない。明和二年武鑑に[3]、

大坂御城御在番大番頭八月代リ
八千石　あたこの下　本堂伊豆守

とある。

しかも、彼の実父は上野安中藩主の板倉勝清であった。板倉の主要な経歴は、次のようになる。これ以上のキャリアを持つ者は、当時、田沼意次のみである。

享保二十年（一七三五）　寺社奉行、若年寄
宝暦十年（一七四九）　側用人
明和四年（一七六七）　西の丸老中

明和六年　（一七六九）　老中

板倉は田沼意次とともに長く老中職を務める。田沼時代における最高レベルの要人といえる。

大小暦の流行には、幕閣の中枢にいた本堂親房・板倉勝清父子の存在も看過しがたい。

五　田沼時代の政治と文化

錦絵の進展に大小暦の流行が寄与している。しかし、大小暦の流行の文化的あるいは政治的背景については、これまで未詳な部分が多かった。

今回、大小暦の流行において「頭取」と見なされてきた巨川・莎鶏が江戸座俳諧の二世祇徳と深く結びついており、二世祇徳こそが仕切り役であったと推測されること、そしてその二世祇徳の背後には板倉勝清・本堂親房父子が存在したことを指摘した。

明和・安永期の江戸では、絵画（錦絵）と文芸（俳諧）が有機的に結びついている。明和・安永期は、田沼意次が権力の中枢にいた田沼時代である。藤田覚（日本近世の歴史4『田沼時代』〔吉川弘文館、二〇一二年〕「五　発展する田沼時代の文化」）は、次のように指摘する。

田沼意次は、子孫に遺した遺訓のなかで、家来たちに学問と武芸に心がけさせることを求めた。それは武家の遺訓・家訓としてありふれているが、

武芸心がけ候うえ、余力をもって遊芸いたし候義は勝手次第、差しとめるに及ばず候こと、ただし、不埒なる遊芸は致させまじきこと

というのは珍しい。不埒な遊芸は駄目だというものの、武芸に励んだあとの余暇に遊芸を嗜むことは自由にさせよ、という。

…

老中職にある大名が、家来が風雅の世界に親しみ、遊芸を親しむことを許容する、ということは、武士が風雅や芸能の世界に遊ぶようになることを後押しするものであったろう。武士、とくに江戸在住の武士が、文化の担い手として登場する背景のひとつであろう。（傍線稿者）

この指摘は、重要なものと考える。

既に、拙稿で述べたが、複数の田沼派幕閣を含め、多くの大名・旗本が二世祇徳の歳旦帖に入句している。特に、常陸笠間藩主牧野貞長の存在は重要である。彼は、奏者番・寺社奉行・大坂城代・京都所司代を歴任し、老中まで昇進しただけでなく、牧野の息子と田沼の孫娘が結婚しており、田沼とは姻戚関係にあった。彼もまた正しく幕閣の中枢にいた人物である。当時、大名・旗本は、これまで

の想像以上に文化に深く関与していた④。

本稿では、浮世絵と俳諧、そして政治との関係について述べた。今後はさらに広い視野で調査・検討していくべきであろう。

注

① 拙稿「窪俊満と江戸俳諧」（『浮世絵芸術』一七五号〔国際浮世絵学会、二〇一九年二年〕）。

② 拙稿「幕府役職者と二世祇徳交流圏」（『連歌俳諧研究』一三六号〔俳文学会、二〇一九年一月〕）。

③ 『江戸幕府役職武鑑編年集成十三巻』（東洋書林、一九九七年）。

④ ②に同じ。

〔付記〕 本稿は、日本近世文学会令和元年度春季大会（鶴見大学、六月九日）における口頭発表「大小暦と二世祇徳」の前半部分を加筆・修正したものである。